

2024年10月20日 礼拝説教要旨  
ヨハネによる福音書講解説教14「主を迎えるために」  
ホセア2：18～22、ヨハネ3：22～30

ヨハネによる福音書第3章22節以下は、この福音書におけるヨハネ自身の最後の証言となります。これ以降、この福音書ではヨハネは登場してきません。その後ヨハネはどうなったのか。他の福音書はヨハネの投獄と殺害を伝えています。ヨハネは領主ヘロデの身勝手な理由から捕らえ、しかも宴会の席で殺されてしまいました。イエスさまのために、その道備えをした人の生涯としてはあまりにも理不尽な最後。まったく報われていないかのように思える。ヨハネの人生とは一体何だったのかと問わざるを得ないような最後です。

今日のところを読むと、イエスさまと洗礼者ヨハネが同時期に活動していたことが分かります。しかもヨルダン川を隔てて、向こう側とこちら側でそれぞれ洗礼を授けていた。そうなる就容易に想像がつかますのは、そこに対抗意識が芽生えてくるということです。例としてはあまりふさわしくないかもしれませんが、わたしが毎週日曜日の夜、伝道所に行く途中に、道を隔てて回転寿司が向かい合っているところがあります。もし自分が店員なら向かいのお店の様子が気になってしょうがない。向こうが賑わっていれば、どんな商品を扱っているのか。こっちも負けていられない。ヨハネの弟子たちもそういう心境だったのかもしれませんが。「ラビ、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの方が、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行っています」(1：26) みんなあっちへ行く。あっちが賑わっている。こっちの方が前からやっていたのに、新参者が後から来て、いい迷惑だ。お客をとられて商売あがったりだ。そういう妬みのような感情もあったかもしれません。

ところが、これに対して洗礼者ヨハネ自身はどうであったか。「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」(30節)「あの方」とは、言うまでもなくイエスさまのことです。イエスさまは栄えて、わたしは衰えていかねばならない。「ねばならない」ですからそこにはヨハネの強い意志があります。むしろ積極的にこの現実を受け入れています。しかも「わたしは喜びで満たされている」(29節)とさえ言う。これはやせ我慢でしょうか。そうではありません。ヨハネは、自分がイエスさまの道備えをする者であるという自覚がありました。このお方が来たら、自分は身を引く。しかもそれは彼の喜びでもありました。

29節を見ると、ユダヤ人の結婚式の様子がここに譬えとして語られます。ここで重要なことは、ヨハネは自分を「介添え人」としていることです。結婚式の主役はやはり新郎新婦でしょう。そこに介添え人が付き添って結婚を見届ける。花婿が無事に花嫁を迎えたら、介添え人の役目はもう終わりです。二人が一緒になれば十分介添え人の務めは果たしたことになります。やれやれこれで役目は終わった。それは介添え人にとっては大きな喜びではないでしょうか。ヨハネはそういう心境なのです。

けれども、ここでのヨハネの立場は、もっと深い意味を持っています。イエスさまに場所を明け渡すことで人生に本当の主を迎える。そのために自分が退く、身を引くことが求められています。身を引かないとイエスさまを迎えられないのです。いつまでも自分が主人であり続けることで、本当の人生の主人、この人生を始められ、完成へと導かれる主人を迎えられない。けれどもそれがなかなかできない。そこに人間の罪があります。

そもそも人間の罪とは、自分が神になろうとすることです。アダムとエバは木の実を食べて、神のように賢くなろうとした。自分が神になる。神さまを差し置いて、自分がすべてを支配し、すべてを把握しようとする。いつまでも中心にいたい。いつまでも主人でありたい。そういう思いからわたしたちはなかなか自由になれません。それがこの世の様々な悲慘を生み出しています。どんな人間関係でもそうですが、いつまでも権力にしがみつ়く人がいます。なかなか後進に譲れない人、退くことができない人がいます。たとえ退いても、いつまでも口を出す。退いたら自分になくなると思うのかもしれません。しがみつ়くことで自分を保とうとしているのかもしれません。

でも考えてみれば、わたしたちは人生において必ず身を引く経験するのです。特に歳をとれば、いやでも身を引かないといけない。病気をして思うようにならない。それは身を引く一つの目安なのでしょう。潮時なのです。そして人はやがて死を迎えます。それは人生最大の幕引き、引退です。そこに寂しさを覚える人は多い。だから死にたくない。しがみつ়いてでも生きていたいと思う。でも、退いてこそ見えてくる世界がある。退くことで新しい世界が広がる。そのことを可能にするのが信仰です。

もう一度29節に注目してください。この「介添え人」と訳された言葉は「友」と訳すことができます。ヨハネは、自分が介添え人であることに徹することで、実は自分の人生に寄り添い、介添えして下さった本当の友を見出したのではないか。それはイエスさまです。ここで思い起こしたいのはヨハネ福音書の第15章にあるイエスさまの言葉です。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである」(15:13~15)

イエスさまは、わたしたちの友となってくださいました。その友がわたしたちのために命を捨ててくださったのです。そのようにして、わたしたちが退く先に新しい命を備えてくださいました。なかなか身を引けないわたしたちのために、イエスさまが自ら身を引かれ、十字架で衰え、死んでくださった。そして三日目によみがえってくださって、そこに新しい命を備えてくださったのです。確かに退くことは寂しいことです。年老いて、病気をし、いやでも身を引かざるを得ない。でもその衰えゆく命の先に、信仰によってわたしたちは新しい命を見ることができる。退いてこそ、そのようにわたしたちの人生を導いてくださる本当の人生の主を迎えることができるのです。だから衰えてもいい、退いてもいいのです。ヨハネの喜びもそこにあったのではないのでしょうか。「花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている」(29節) 退く先にその花婿の声をヨハネは聞いた。「あなたはわたしの友だ」その声を聞くことができる人生は何と幸いでしょう。報われないと思えるような人生でも、その声を聞けるだけでわたしたちは十分喜びに満たされるでしょう。

天の父よ。報われていないと思う人生かもしれません。そういう中で静かに身を引く、退いていくような寂しさを感じるかもしれません。けれどもあなたは御子の十字架とよみがえりによって、その人生の先に新しい命を備えてくださいました。わたしたちはそこを望み見ながら生きるのです。そこを望み見ながらこの世の生涯を閉じるのです。その幸いを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。